

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 18 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02807

研究課題名(和文)多読授業に活用されるEPERテストの妥当性と読む速度の発達における多読の効果

研究課題名(英文)The Validity of EPER Test and the Effects of Extensive Reading on the Development of L2 Reading Fluency

研究代表者

吉澤 清美(Yoshizawa, Kiyomi)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：80210665

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文): 多読を授業内外で一年間継続することは、外国語での読みの流暢さ、読解力を発達させる。また、多読グループの学習者の文法知識、読む速度、読解力を一年間定期的に測定し、データを潜在プロファイルモデル分析にかけた。結果、3つの潜在クラス(クラス1～3)が浮かび上がり、そのうちクラス1の学習者の読みの流暢さ、読解力は徐々に発達するが、クラス2, 3の学習者と比較すると伸びは低かった。この点は先行研究の結果と異なる。更に、クラス1と3の学習者の読書記録を分析した結果、クラス3の学習者はクラス1の学習者の約2倍弱の読書量であった。また、両クラスとも、秋学期は春学期の約2倍の読書量であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、読みの流暢さの発達、読解力の発達、両者の関係並びに読書量との関係をより明確にすることにより、外国語での読みの発達メカニズム解明の一助となった。また、本研究は読書量だけではなく、多読開始時の学習者の言語知識がその後の外国語での読みの流暢さの発達、読解力の発達に影響することを示唆しており、流暢さ、読解力の発達を妨げる要因を明確にすることにより、両者を発達させる効果的な指導や学習目標を示すことができ、本研究の教育的示唆は大きい。

更に、多読プログラムで活用されるEPERテストはテストとしての社会性は高く、本研究はEPERテストの妥当性に関わる根拠を提供するものである。

研究成果の概要(英文): The results of the present study indicated extensive reading has a facilitative effect on the development of text reading fluency and reading comprehension among Japanese EFL learners. Latent profile analysis was conducted to find latent classes of related cases (individuals) from multivariate data. Three classes emerged and they were named Class 1 to 3, with 1 being least capable. The results showed the reading rate and comprehension gain scores were all positive across all three classes. However, the reading rate and comprehension gain scores in Class 1 were smaller than those of other classes. The detailed analyses of the reading behaviors of Class 1 and 3 showed that the learners in Class 3 read almost two times more than those in Class 1 and both groups showed similar reading patterns. Further, the results implied that grammatical knowledge at the onset of an extensive reading program was one of the crucial factors to influence EFL learners' reading fluency and comprehension.

研究分野：英語教育

キーワード：多読 外国語での読み 読みの流暢さ 読解力 外国語としての英語 読書量 EPERクローズテスト 妥当性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語の多読 (Extensive Reading) 授業では、教師の指導の下で学習者各自の英語のレベルに合わせて読み物 (graded readers、leveled readers など) を選択し、読んでいる内容理解に焦点をあて、楽しみながら英語を読み続けていく (Day & Bamford, 1998; Takase, 2010)。多読の効果に関しては、多くの先行研究がその効果を実証している。多読は、(1) 読解力の向上、(2) 語彙知識の向上、(3) 総合的な英語力の向上、(4) 書く能力の向上、そして(5) 統語力の向上に効果があることが分かった (Day, Omura, & Hiramatsu, 1991; Hafiz & Tudor, 1989; Iwahori, 2008; Lai, 1993; Maruhashi, 2011; Mason & Krashen, 1997; Masuhara, 他, 1996; Robb & Susser, 1989; Takase, 2008; Waring & Takaki, 2003)。また、学習者の英語嫌いの緩和、英語で読むことへの動機づけなど情意的な面の効果も検証されている (Robb & Susser, 1989; Takase, 2008)。

更に、近年、L2リーディング研究において、多読が黙読をする際の読みの流暢さ (fluency) にどのような効果があるのかについての研究も僅かながらではあるが進められている (Beglar, Hunt, & Kite, 2012; Bell, 2001; Hoffman, 2014; Robb & Susser, 1989)。読みの流暢さは研究者によって定義が異なるが、主に自動処理化 (automaticity)、正確さ (accuracy)、読む速度 (reading rate) から成ると考えられている (Grabe, 2009)。

読みの流暢さとは、単に読む速度が上がるというだけでなく、そこにはリーディングにおける下位レベルのプロセスやスキルの自動処理化 (automaticity) が行われることにより、より限られた認知的リソース (attentional resources) をテキストの内容理解に充てることが出来ると考えられる (Segalowitz, 2010)。読みの流暢さを読む速度としてとらえたL2リーディング研究の中で、Logan (1997) は処理する言語インプットの量が読む速度を発達させる鍵であると言う。これまで報告されている多読と読む速度の発達に関する実証研究から次の2点を一般化することができる。第一に、多読は読む速度の発達を促進する。この効果は、一年未満の多読プログラムでも起こる。しかしながら、読む量と読む速度との関係を直接調べた先行研究は極めて少ない (Beglar & Hunt, 2014; Beglar, Hunt, & Kite, 2012)。第二に、多読は言語能力の低い学習者の読む速度の発達に効果的である。これまでの実証研究では、読む速度が1分間に100語未満の学習者に効果的であると報告されている (Beglar & Hunt, 2014)。

他方、多読を日本で実践するにあたり、いくつかの問題点も指摘されている。その一つが日本人学習者の言語能力に適した読み物 (リーダー) を選択するためのレベルチェック、更に読みの伸びを測定する方法である。一つの方法として、Edinburgh Project on Extensive Reading (EPER) のプレイスメント・プログレステストを用い、その結果を元に学習者がどのレベルから多読を始めるのが効果的であるかの目安を得る (Takase, 2010)。EPER テストとはエジンバラ大学多読研究グループが開発したクローズテストであり、学習者のプレイスメントだけではなく学習の伸びを調べることが可能であると言われる。一般的に、決まった間隔で空白を設ける (random deletion) クローズテストは全般的な言語能力を測定する手段として提案された (Oller, 1979) が、統語能力、テキスト内の結束性を測るとも言われ (Chapelle & Abraham, 1990)、クローズテストが何を測定しているかは研究者間で意見が分かれる。EPER テストに関しては、妥当性に関する文献が皆無であり、これまでに妥当性研究が行われていない (Irvine, 2014)。EPER テストが多読プログラムでのプレイスメント並びに読みの発達の測定に使われるのであれば、その妥当性研究は緊急を要する課題である。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの国内外の多読研究あるいは外国語での読みの研究ではその先行研究が皆無あるいは少ない、次の3点について、量的、質的なアプローチをとりながら検証する。

- (1) 多読を継続することにより読みの流暢さはどのような時系列的变化を見せるのか。更に、多読開始時の英語力、読書量と読みの流暢さの発達はどのような関係にあるのか。
- (2) 読みの流暢さが発達する学習者とそうでない学習者は読む量と読み方に違いがみられるのか。
- (3) EPER クローズテストが多読プログラムのプレイスメント並びに読みの発達の測定に妥当なテストであるかどうか。

3. 研究の方法

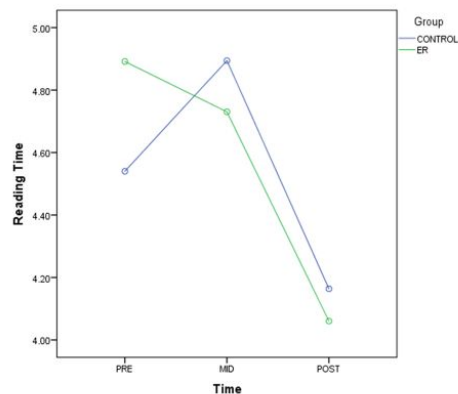
(1) 上記研究目的(1)(2)のために、以下を実施した。日本人大学生を対象とし、データ収集に協力していただく多読実践クラス、多読を行わないリーディングクラスに参加いただき、前者を実験群、後者を統制群とした。実験群は一回目の EPER クローズテスト結果に基づいて、各自の能力にあった多読本を継続して授業内外で読んだ。多読本は英語学習者の各言語レベルに合わせた語彙、構文を用いて書かれた読み物(Graded Readers)並びに英語母語話者が読む能力を養うために書かれた読み物(Levelled Readers)の両者を読んだ。学習者は各本の読了後、読書記録を記入した。また、夏休み中も継続して、多読を行った。各学期の最後並びに夏休み終了後にそれぞれ読了した多読本から1冊を選択し、感想文を英語で書いた。統制群はリーディング用教材を使い、内容理解中心とした精読授業を受け、教科書を中心とした定期試験が年間4回実施された。学習者は毎週授業への準備と語彙テストの準備を行った。春学期開始時(多読授業開始前)、春学期終了時、秋学期終了時の3回にわたって、EPER(エジンバラ大学英語多読プロジェクト開発)クローズテストを実施した。前記 とほぼ同時期に、学習者の読む速度を複数回測定した。毎回、約400単語の英文(Flesch-Kincaid Grade Level 6~9)を読んだ後、読み返しをせずに8つの選択肢形式の読解問題に解答した。多読クラスの学習者の読書量を算出するため、各学習者には読書記録をつけてもらった。春学期開始前、秋学期終了時に、EPERリーディングテストを実施した。各レベルとも物語であり、物語を読み進めるうちに、解答する箇所の指示が出されるという形式をとっている。問題は選択肢形式と記述形式の両方をもつ。

(2) 上記研究目的(3)のために、以下を実施した。 EPER クローズテスト結果に基づき、実験群の学習者が読み始める多読本のレベルを EPER 推薦レベルとする。 EPER 推薦レベルに対応する多読本、 EPER 推薦レベルよりも1レベル低い多読本、2レベル低い多読本を各1冊(合計3冊)を全員分準備し、各学習者に1冊10分間黙読してもらった。各レベルの本を10間読んだ後、参加者は10分間で読み終えた頁と行、未知語、本のレベルの適切さ、日本語訳の程度についての質問に回答した。他の二つのレベルについても同様に繰り返した。これを10分間リーディングと呼ぶ。 研究参加者から希望者を募り、Test of English for Business Communication IP(TOEIC IP)を春学期開始前、秋学期終了時に受験してもらった。

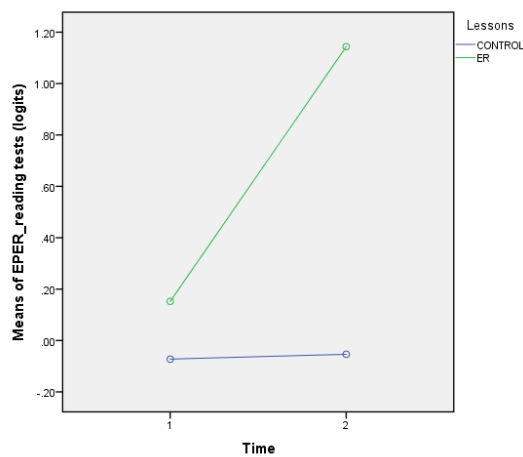
4. 研究成果

- (1) 英語での多読を継続することは日本人英語学習者の読む速度を向上させるのか。

右図は緑が実験群、青が統制群を示し、X軸がデータ収集時期（春学期開始時（PRE）、春学期終了時（MID）、秋学期終了時（POST））、Y軸は英文の読みにかかった時間の平均を表している。2元配置分散分析を行った結果、グループと時間間に交互作用があったため、単純主効果検定を行った。その結果、実験開始時のグループ間の読む速度には統計的に有意な差がみられた。しかしながら、中間時点では二つのグループの読む速さに有意差は見られなかった。更に、実験終了時にはグループ間の読む速度には統計的に有意な差がみられ、実験群は統制群よりも読む速度が速かった。このことは、実験開始時には統制群の読む速度が速かったが、中間時点までに実験群は統制群の読む速度に追いつき、実験終了時には統制群よりも読む速度が速くなっていった。各グループ内の時間の単純効果を調べた結果、すべての対比に有意差がみられた。実験群では学期が進むにつれて読む速度が徐々に上がっている。統制群も同様のパターンがみられたが、唯一の違いは、統制群では中間時の方が開始時よりも読むスピードが遅くなっていた。



(2) 英語での多読を継続することは日本人英語学習者の読解力を促進させるのか。右図が実験群、統制群の EPER リーディングテストの結果を示している。EPER リーディングテストのデータはラッシュ分析を行い、各学習者のリーディング能力はロジットで表す。X軸がデータ収集時期（春学期開始時（Time 1）、秋学期終了時（Time 2））、Y軸は各学習者のリーディング能力の平均を示す。2元配置分散分析を行った結果、グループと時間間に交互作用があったため、単純主効果検定を行った。その結果、実験開始時には二つのグループには有意差はなかったが、実験終了時には有意差がみられた。次に、各グループ内での、事前、事後を比べた場合、統制群は事前と事後での差がみられなかったが、実験群では有意差が見られた。



(3) 多読を通して読みの流暢さを発達させた学習者とそうでない学習者は読む量、読み方に差があるのかどうか。この点を検証するため、参加者に日英バイリンガル文法テストを春学期開始時（多読授業開始前）、春学期終了時、秋学期終了時に受けてもらい、データにラッシュ分析を行った。実験群のみのデータを使い、文法テスト、読む速度、読解結果を用いて、潜在プロファイルモデル分析を行った結果、多読グループの学習者は3つの潜在クラスに分類された。26%の学習者がクラス1、57%がクラス2、18%がクラス3にそれぞれ属した。クラス1の学習者の文法能力は学期が進むにつれて伸びていったが、他のクラスの学習者との差は年間を通してほぼ1ロジットあり、この差は最後まで変わらなかった。また、読む速度を一分間に読める単語数(WPM)で表すとクラス1は年間を通して10単語強伸び

るものの、WPMが 80 弱にとどまっている。読解正答率に関しては、多読授業開始前から 70%を満たしておらず、この傾向は最後まで変わらなかった。以上からクラス 1 の学習者は読みがあまり発達しないグループと判断した。クラス 2 の学習者の読む速度は春学期開始前は WPM が 80 強であるが、秋学期終了時には 100 まで伸びていた。読解力も春学期開始前から 75%を示し、期間を通して徐々に伸びていた。クラス 3 は開始時点から WPM が 116、読解力 80%あり、期間をとおして読む速さ、読解力が伸びていた。更に、読む速さに関しては、一番大きく伸びていた。クラス 2、3 は読みが発達したグループと判断した。先行研究では多読は言語能力の低い学習者の読む速度、特に読む速度が一分間に 100 語未満の学習者に効果的であると報告されている (Beglar & Hunt, 2014)。先行研究で言われるこの傾向は、クラス 1 の学習者には当てはまらない。また、本研究の結果では、多読開始時に WPM が 100 語以上であるクラス 3 の学習者の読む速度が一番伸びていた。潜在クラス 1 とクラス 3 の学習者の読書記録を分析し、読む量の違いを調べた。クラス 1 の学習者が読了した本は春学期平均約 83 冊、秋学期約 75 冊であった。クラス 3 はそれぞれ 66 冊、55 冊であった。しかしながら、クラス 3 の学習者の 1 冊の語数は約 2 倍長く、秋学期終了時の総語数では約 2 倍弱の量を多く読んでいた。また、どちらのクラスも秋学期は春学期のほぼ 2 倍の読書量であった。読みの流暢さが発達する学習者とそうでない学習者がどのレベルの多読本を各学期に読んでいたのかを調べた。多読本の読みやすさレベルを 0 ~ 6 の 7 段階に分類し、学期ごとにクラス 1 とクラス 3 の学習者がどの段階の多読本を読んでいたのかを調べた。その結果、両クラスの学習者の多読本の読み方のパターンはよく似ていた。春学期には学習者が読みやすいと思える本を読んでおり、秋学期に本のレベルを上げていた。クラス 3 は春学期開始時期から文法、読む速度、読解力がクラス 1 の学習者よりも高く、この違いが読書量の違いを生み出しているのではないかと思われる。

(4) EPER クローズテストが多読プログラムのプレイスメント並びに読みの発達の測定に妥当なテストであるかどうか。この点については、10 分間リーディングの分析を鋭意行っており、分析終了後、EPER クローズテスト、EPER リーディングテスト、TOEIC IP とのかかわりを分析する。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Yoshizawa, Kiyomi, Takase, Atsuko, & Otsuki, Kyoko. (2018). How Does Extensive Reading Help Japanese EFL Learners Develop Grammatical Knowledge and Reading Fluency?, *The Fourth Extensive Reading World Congress Proceedings*, pp. 1-11. 査読有。
<http://jalt-publications.org/content/index.php/jer/article/view/117>

吉澤清美・高瀬敦子・大槻きょう子、2017、日英バイリンガル文法テストの開発：多読とのかかわりにおける文法能力の発達を測定する、『外国語学部紀要』第 16 号、pp. 45-60 査読無。 http://www.kansai-u.ac.jp/fl/publication/pdf_department/16/47yoshizawa.pdf

吉澤清美・高瀬敦子・大槻きょう子、2017、多読は日本人英語学習者の文法能力の向上にどのように影響するのか、『日本多読学会紀要』第 10 巻、pp. 7-28、査読有。
<http://jera-tadoku.jp/bulletins/2017-03-bulletin10.pdf>

〔学会発表〕(計 10 件)

吉澤清美、高瀬敦子、大槻きょう子、多読が文法力と読解力の発達に及ぼす影響とその関連性、日本多読学会 2018 年次大会 (東京工業高等専門学校) 2018 年 8 月 4 日

Yoshizawa, Kiyomi, Takase, Atsuko, & Otsuki, Kyoko, How does Extensive Reading Help Japanese EFL Learners to Develop Grammatical Knowledge and Reading Fluency?, The Fourth Extensive Reading World Congress (東京、東洋学園大学), 2017年8月7日

Yoshizawa, Kiyomi, Takase, Atsuko, & Otsuki, Kyoko, The Effect of Extensive Reading on the Development of Grammatical Knowledge and Fluency: in Case of Japanese EFL Learners, American Association for Applied Linguistics 2017 Annual Conference (米国、オレゴン州ポートランド市), 2017年3月19日

6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名：高瀬 敦子

ローマ字氏名：Takase, Atsuko

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：大槻 きょう子

ローマ字氏名：Otsuki, Kyoko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。